



資料 2-2

第 2 回鳥取県津波対策検討委員会



文献資料について

平成 23 年 10 月 5 日



『1833年（天保四年）の津波の記録』

○堺港消防署沿革史

天保四巳年十一月二十六日夜【1833年12月7日】

雲州島根郡七類浦（現在の八東郡七類）に海嘯来たり。海岸線より七十三間余来装、人家田圃など一面海となる。干潮後翌日に至り田圃水溜りに多量の漁獲ある。同夜堺港もその余波をうけ港内満潮余子大明神鳥居より境内まで海水侵入交通杜絶して混乱を呈するも数刻にして潮ひき平常に復せり。

【境港市役所によれば余子大明神は現在の大港神社（栄町）】

○境港沿革史 小泉□□編纂 大正四年十二月発刊

其五 海嘯

天保四年巳十月二十六日【1833年12月7日】の夜雲州島根郡七類浦の海嘯は海岸より七十三間余海水上りて人家田圃とも一面海となりて田口に数口の魚類遊泳し干潮後翌日に至り深き水溜りより魚類澤山拾ひ取りしと云ふ、同夜當湊も其餘波を被り湊内満潮、餘子大明神鳥居より境内へ海水浸入し交通杜絶し一時はみな家を出て身を避んとすると幸にして数刻ならずして潮曳きみな安心したりと記録に見へたる^{のみ}而已ならず其當時を記憶せし老人の○物語りを著者聞きし事あり云々。

○新修境港市史 平成九年発行

・境港周辺異常気象・異常現象略年表

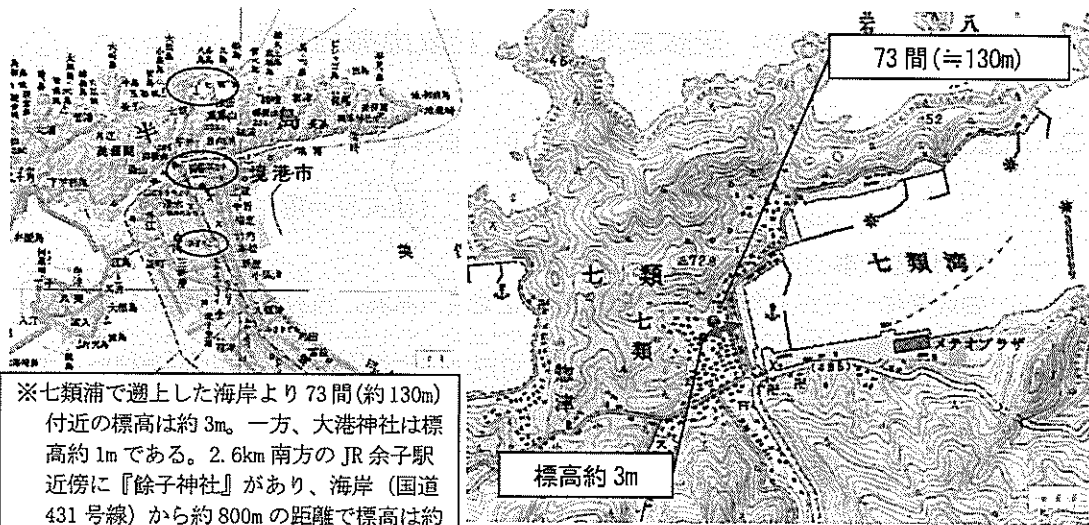
一八三三	天保四・一〇・二六【1833年12月7日】	島根半島七類浦津波。海岸より七三間余り海水上る（美保関町誌）。境港も湊内満潮、余子大明神鳥居より境内へ海水侵入（堺港沿革史）。
一八五四	嘉永七・一一・一四【1855年1月2日】 嘉永七・一一・一五【1855年1月3日】	午前八時ごろ中位の地震（歴歳記録）。 午後四時ごろ大地震（歴歳記録）。

【1854年の地震は 嘉永7年11月14,15日ではなく安政元年11月4,5日【1854年12月23,24日】の安政東海地震・安政南海地震と思われる】

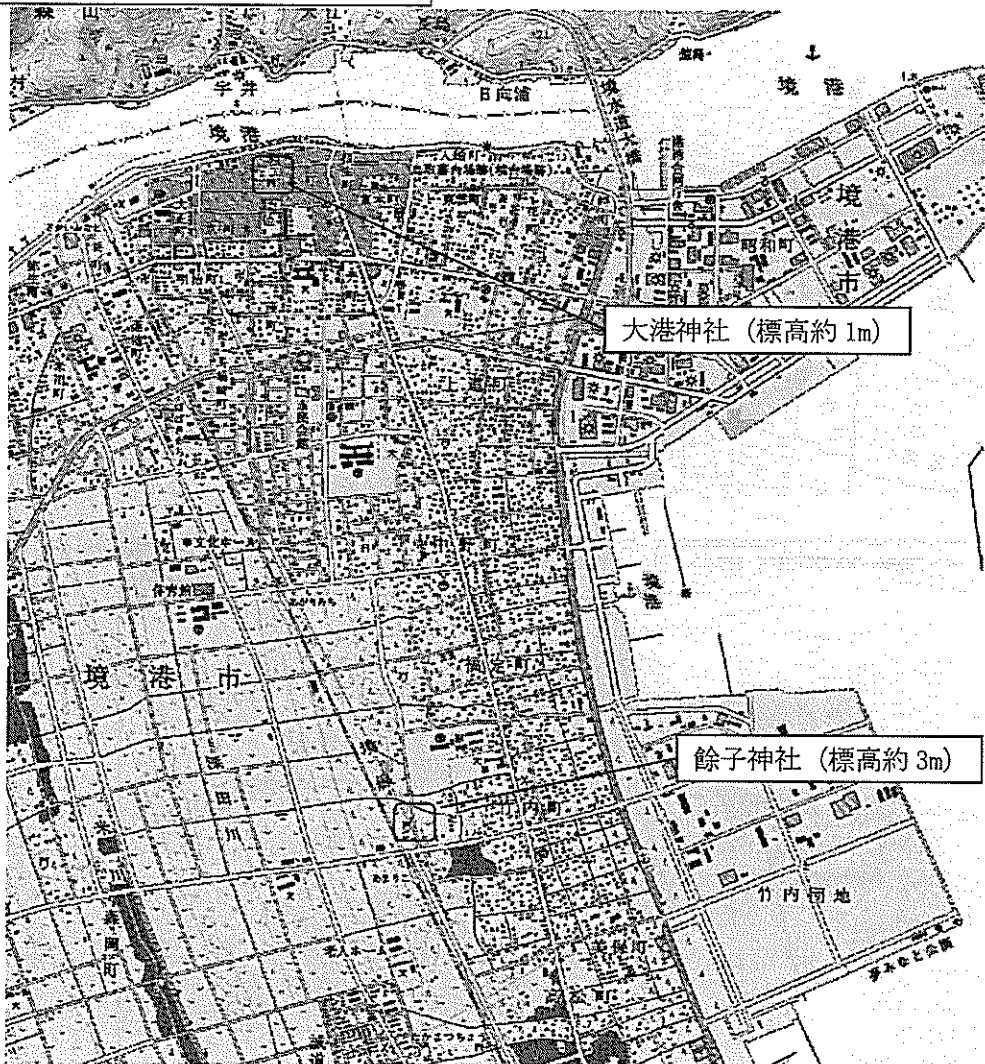
《参考》理科年表（平成20年版）

・1833年12月7日（天保4年10月26日） 38.9° N 139.25° E M7 1/2

羽前・羽後・越後・佐渡：庄内地方で特に被害が大きく、潰家475、死42、津波が本庄から新潟に至る海岸と佐渡を襲い、能登で大破流出家約345、死約100。



※七瀬浦で遡上した海岸より73間(約130m)付近の標高は約3m。一方、大港神社は標高約1mである。2.6km南方のJR余子駅近傍に『余子神社』があり、海岸(国道431号線)から約800mの距離で標高は約3mで、七瀬浦における遡上高さと同程度である。



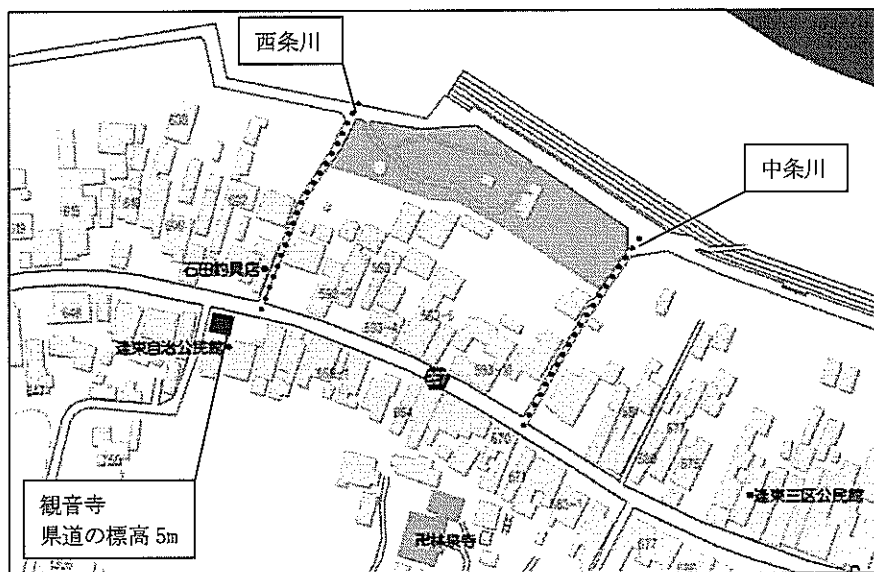
『1854年（安政元年）安政東海地震・安政南海地震』

○「逢東村史之実録」 大正一五年（一九二六年） 松井儀平著

【^{おうつか}逢東村=現在の琴浦町】

一、天災地変の事

「安政元年（一八五四）甲寅。諸国大地震突波（津波）当村中条川の北側の家々に打ち掛かり、海岸は怒涛高く巻上り北浦戸口より湛え込み、^{むら}筵、空き俵等にて堰き止めをなして、防御す。西条川は津波巻上がり約五十間（約91m）隔たりし観音寺門前の石垣に打ち付けたり。震うこと日夜数十度一週間以上及べり。」



○境港沿革史 小泉□□編纂 大正四年十二月発刊

其二 大地震

當地に観する地震の記事は古書□記に至りて甚だ稀にして漸く二三の記事を探り得たれば左に紹介せむ。

文政元戌の年大地震、(黄泉津□穴□) 【1818年】

天明二虎の年大地震(堺雜記) 【1782年】

嘉永七年(改め)安政元寅の年大地震、十一月四日朝五ツ時【1854年12月23日午前8時】地震始り、五日七ツ時【1854年12月24日午後4時】□震、米子屋武助家倒れ、小西屋五兵衛土蔵大□□、安宅屋□八家大破損、□□□□酒店大破損、安宅屋久左衛門家大破損。鼻の吉野家政兵衛土蔵倒□、助四郎家大破損、茂七家大破損、その他家、土蔵、納屋等の破損せしもの一々枚挙に遑あらず而して村民はみな我家より出で畑の中或は竹藪のわきに一時住居の小屋を建築して避難したり『大東吉兵衛日記』。

○「鳥取藩、在方諸事控」

「安政元年十一月十一日【1854年12月30日】。

一、去ル五日晚七ツ時【1854年12月24日午後4時頃】より度々地震致し、村々破損所并ニ崩家等有之趣相聞候ニ付、取調書付ニシテ申達シ候様、因伯御郡々并町庄屋迄申遣シ置候、夫々申達シ候ニ付、今日帳面ニシテ長^長役ヨリ御家老中え御達シニ相成候事。」

「同廿七日【1855年1月15日】、

一、去ル四日、同五日【1854年12月23、24日】兩日廿数度大地震、并同月十六日【1855年1月4日】之夜ハ古来稀成大風ニテ、御郡々破損所、崩家等説^{おびただし}夥數有之趣相聞候ニ付、破損之次第^{ついで}眞^{まこと}サ書付ニシテ申達シ候様、因伯御郡々之申遣シ置候処、夫々申達シ候ニ付左之通整紙ニ相認メ、今日御家老中之申達シ候事。

御兩國大地震破損所書付。

甲寅十一月四日、同五日【1854年12月23日、24日】大地震ニ付品々破損因州分

- | | |
|-----------|-----------|
| 一、崩家貳軒。 | 一、損家六軒。 |
| 一、土蔵崩四ヶ所。 | 一、土蔵損四ヶ所。 |

伯州分

- | | | |
|---------------------------|-------------------------|-----------|
| 一、田畑沈 ^{しん} 壺反八畝。 | 一、地沈 ^{しん} 壺ヶ所。 | 一、崩家八軒。 |
| 一、損家四拾軒。 | 一、土蔵崩三ヶ所。 | 一、土蔵損十ヶ所。 |
| 一、堀覆崩拾三間。 | 一、大木根返リ壺本。 | |

・参考資料

①「日本の正史。別巻五。年表」昭和四十二年発行

「安政元年十一月【1855年1月】諸国地震、駿河、遠江、伊豆、相模の被害多大。

下田碇泊のロシア軍艦ディアナ号破損する。」

②「日本史年表」 歴史学研究会編（一九六六年発行）

安政元年（一八五四）十一月四日【1854年12月23日】

「諸国大地震、下田に津波が襲い、プチャーチンの乗艦ディアナ号大破沈没。」

③理科年表（平成20年版）

・1854年12月23日（安政1年11月4日） 34.0° N137.8° E M8.4

東海・東山・南海諸道：『安政東海地震』：被害は関東から近畿に及び、特に沼津から伊勢湾にかけての海岸がひどかった。津波が房総から土佐までの沿岸を襲い、被害をさらに大きくした。この地震による居宅の潰・焼失は約3万軒、死者は2千～3千人と思われる。沿岸では著しい地殻変動が認められた。地殻変動や津波の解析から、震源域が駿河湾深くまで入り込んでいた可能性が指摘されており、すでに100年以上経過していることから、次の東海地震の発生が心配されている。

・1854年12月24日（安政1年11月5日） 33.0° N135.0° E M8.4

機内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道：『安政南海地震』：東海地震の32時間後に発生、近畿付近では二つの地震の被害をはっきりとは区別できない。被害地域は中部から九州に及ぶ。津波が大きく、波高は串本で15m、久礼で16m、種崎で11mなど。地震と津波の被害の区別が難しい。死者数千。室戸・紀伊半島は南上がりの傾動を示し、室戸・串本で約1m隆起、甲浦・加太で約1m沈下した。

『1859年の地震』

○上道村史料【現在の境港市上道町】

飢饉地震大火

安政六年【1859年】の地震稍大潰屋二三人當死傷なし飢饉は天保六七年にて窮民多く粥を施すこと無数なりしより文久元年の火災は村家十分の八を焼燼せり。

風水近時の猛烈なりしもの明治六年【1873年】十九年【1886年】廿六年【1893年】の三度中にも廿六年の海嘯は枉風暴雨高浪屋の如く海水陸地を浸すもの百間に及ぶ日野川反乱岸本の新大橋を落して海中を轉流すること四里上道の濱に打寄す。

【参考】理科年表（平成20年版）

・1859年10月4日（安政6年9月9日） 34.5° N 132.0° E M6.0～6.5

石見：島根県那賀郡で強く、周布村でも潰家や地割れがあった。広島城内でも被害があった。

『時代不詳 鳥取市周辺の津波』

○【改訂国府町誌】平成一六年発行

第二章 民話・伝説 二、大津波

むかしむかし、平和な国府の里の西の空に怪しい雲が出て、賀露の沖から海鳴りが日ごとに大きく聞こえてきた。人々の不安な日が続いた後、ひととき大きな海鳴りとともに大津波が起こり、賀露の浜から鳥取の町を一飲みにして、国府の里におし寄せた。激しく雨の降り続く中、人々は津波に追われて命がけで高いところへ駆け上がった。

一宮の社の庭には数千の人が逃げ集まっている、高い石段がつぎつぎに水で見えなくなった。人々は一生懸命津波の引くのを神に祈ったが、水はついに神殿の庭まで来て避難の足もとを濡らした。それでもしばらくして大ぜいの人の神に祈る声が天に通じたのか、東の空がかすかに明るくなるころ津波の音も少しずつ小さくなり、雨もやんだ。水も徐々に減っていった。

ところで、この津波に最中のときである。岡益の奥の私都に越すところで、溢れた水が私都方面に流れだし、同時に松尾の土堂薬師のお堂の上まで水がきた。このことからのに、岡益の奥を「水越」というようになり、一宮さんの広庭と水越と薬師堂の高さが同一、と語られるようになった。

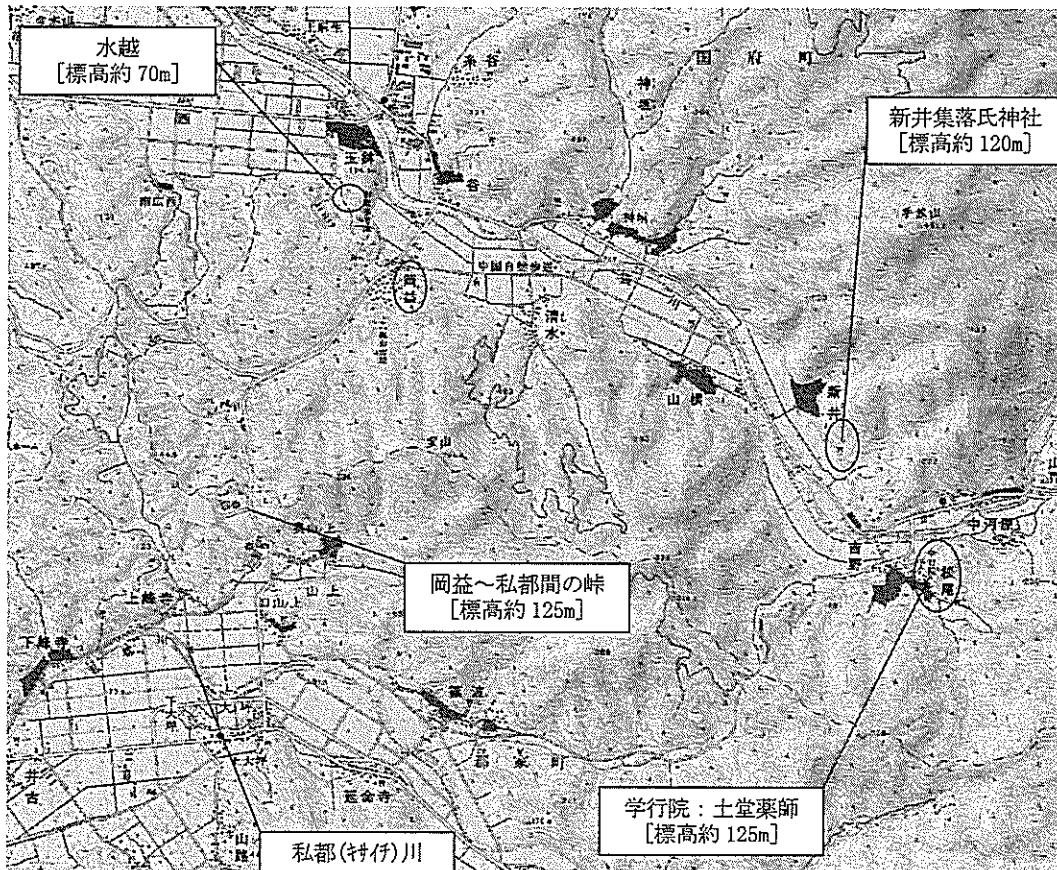
それから津波が引いて二、三日して人々の目に不思議なものが映った。山の上に小舟が一艘止まっていたのである。新井村の氏神様の右側の山の中腹である。大津波に木の葉のように揺られて打ち上げられたものであろう。人々はこれを見て今更のように津波の恐ろしさを感じた。のちにこの地は「舟山」と名づけられた。

むかしから恐ろしいものに地震・かみなり・火事・おやじと決っておるが、この中にどうして津波が仲間入りしてないのかと古老はいつも語っていた。むかしむかしの話である。





- ・国府町誌によれば、一宮（宇倍神社）と水越と松尾の薬師堂まで水が上がり、これらが同標高とされている。
- ・水越は標高 70m 前後である。
- ・松尾の薬師堂と新井集落の氏神社は標高約 120～125m で同標高である。また、岡益から水都へ至る峠の標高は約 125m である。
- ・現在の宇倍神社の境内は標高約 40m である。宇倍神社付近での標高 120m 地点は電波塔付近となる。



歴史地震の記録(2)

※因…因年表、詳…要録中島県誌、詳…新設日本地震史、理出年表に於ける記述

No	年月日	西暦月日	発生時間など	規模(M)	震度	経度	緯度	震源	震害
51	寛政7年11月24日	1795年11月3日	赤の朝(午後2時頃)、前代未著の大地震。運日動揺。		3.5	35.7° N	134.3° E	5~6	岩奥明で急の揺が落ち、石塔倒れ、地下水の異常があった。余震が翌年正月まであった。
52	寛政7年12月18日	1795年12月27日	震害。						
53	寛政8年2月4日	1796年3月17日	震害。						
54	寛政8年2月9日	1796年3月22日	震害。						
55	寛政8年11月13日	1796年12月11日	震の朝(午後10時頃)。						
56	寛政8年2月14日	1797年3月12日	震の朝(午前10時頃)。						
57	寛政11年3月16日	1798年3月16日	巳の朝(午前10時頃)。						
58	寛政11年3月16日	1798年3月16日	申の朝(午後4時頃)。						
59	寛政12年2月2日	1800年2月25日	震の朝(午後8時頃)。						
60	寛政13年1月14日	1801年2月26日	赤の朝(午後2時頃)、大地震。						
61	天明2年6月4日	1802年7月3日							
62	享和2年10月22日	1802年11月18日							
63	享和3年2月25日	1803年5月14日							
64	文化元年2月12日	1804年4月10日							
65	文化元年4月9日	1803年5月17日							
66	文化5年10月16日	1808年12月3日	亥の朝(午後10時頃)、丑の朝(午前2時頃)地震。						
67	文化6年4月17日	1809年5月30日	辰の朝(午前8時頃)。						
68	文化7年4月22日	1810年5月24日	辰の朝(午前8時頃)。						
69	文化8年5月3日	1811年6月23日	辰の朝(午後2時頃)。						
70	文化9年3月10日	1812年4月21日	辰の朝(午後8時頃)。						
71	文化10年1月24日	1813年2月24日	辰の朝(午後10時頃)。						
72	文化10年5月3日	1813年6月11日	震害。						
73	文化11年1月21日	1815年3月11日	亥の朝(午後10時頃)、地震強い。						
74	文化13年1月4日	1815年3月11日	黎明。						
75	文政2年2月15日	1819年3月10日	子の朝(午前10時頃)。						
76	文政2年6月12日	1819年8月2日	未の朝(午後2時頃)、地震強い。						
77	文政4年3月1日	1821年4月3日	辰の朝(午後8時頃)。						
78	文政5年6月1日	1823年5月11日	巳の朝(午前10時頃)。						
79	文政6年4月20日	1823年6月5日	辰の朝(午後8時頃)、大地震、夜中に4度震動。						
80	文政6年6月7日	1823年9月11日	亥の朝(午後10時頃)。						
81	文政7年2月1日	1824年3月1日	未の朝(午後2時頃)。						
82	文政10年10月12日	1827年6月4日	未の朝(午後2時頃)。						
83	文政10年12月6日	1827年12月22日	亥の朝(午後10時頃)。						
84	文政10年12月7日	1827年12月23日	申の朝(午後4時頃)、大地震、伊勢国まで揺れ。						
85	文政13年7月2日	1830年8月19日	辰の朝(午後10時頃)、震害。						
86	文政13年11月6日	1830年12月20日	午の朝(午後10時頃)。						
87	天保4年4月6日	1833年5月27日	午後。						
88	天保4年9月22日	1833年10月10日	丑の朝(午前10時頃)。						
89	天保4年9月22日	1833年10月11日	申の朝(午後2時頃)。						
90	天保4年9月22日	1833年10月13日	申の朝(午後2時頃)。						
91	天保4年10月25日	1833年12月6日	申						
92	天保4年10月25日	1833年12月7日							
93	天保6年3月21日	1835年5月18日	申						
94	天保7年9月20日	1836年11月6日	辰七時(午前10時頃)、照り戻しがし。						
95	天保10年6月3日	1837年7月5日	巳の朝(午前10時頃)。						
96	天保10年11月3日	1839年12月3日	辰						
97	天保11年1月21日	1906年2月22日	巳の半朝(午前10時)。						
97	天保2年7月4日	1855年8月16日	八時の朝(午後2時頃)。						
98	天保2年7月12日	1855年8月24日							